

絵
本
学
会
の
10
年

a history for **10** years of the Association for Studies of Picture Books

絵本学会 歴代会長座談会
「絵本学会の十年を振り返る」

吉田新一
太田大八
三宅興子
今井良朗
佐々木宏子
司会・竹迫祐子

竹迫 本日は、歴代会長にお集まりいただき、絵本学会の十年の歩みを振り返りつつ、絵本学会のこれからを考えたいと思います。この十年、何ができて何ができてこなかったのか、多様な分野の方々を会員として擁している本学会の難しさも含め、例えば、絵本研究という側面では何が進み、何が停滞しているのか、また、絵本に関するネットワークという側面ではどういった状況にあるのかといったことを振り返っていたりしながら、今後へ向けてどういうふうな学会が展開していきたいと望ましいかということをお話していただきたいと思っています。

絵本学会創立まで——誕生にかけた熱い思い

太田 絵本学会の話の前に、少し、古い話なんですが、五十年前位前ね。絵本つてものの社会的地位がうんと低かったんですね。それで、僕は初山滋さんとか武井武雄さんたちが作ったグループで、日本童画会というのに入っていたんだけど、その頃は、童画家に著作権なんかなかったわけ、全然。それで絵を描いたらそのまま買取りとって、絵も絵の権利も全部一緒に



太田大八

に買い上げられちゃって、もういくらでも使い放題。原画は返ってこないっていうような状況だったわけね。そういう状況に僕たちは抗議して、ある時、武井さんと僕とで、画家にも著作権があるはずだからそれを認めろという交渉に行ったわけです。そして出版側側の弁護士が二人で出てきて、絵の「効果的著作権」は出版社にあるのであって、絵描きにはないとやったわけ。そのあたりから絵本の絵描きの著作権運動っていうのはじまったんだけど。いわさきちひろさんなんかも教科書執筆に対する著作権がないという状況の中で闘ってね。日本童画会で二年も三年も交渉して、ようやく著作権を認めさせて示談に持ち込んだことがあったのね。そのときの示談金の百万円で、「児童出版美術家連盟」っていう組織を作った。その後、児童図書だけじゃなくて、漫画も、タプローも全部画家の著作権を守ろうということで、美術著作権連合つてのができたんですね。そんな風に絵本の置かれる社会的地位の低さが、絵本学会のそもそもの背景にはあったわけですよ。

それでちょっと時間は飛ぶんだけど、絵本について語り合おうということで、一九九〇年の四月に「PeaBoo」っていう雑誌を絵本ジャーナルとして作ったんだけど、田島征三、長新太とか宇野重吉良とか、皆はせ参じてきたわけ。その16号（一九九四年五月）で「絵本学は構築できるか」という座談会を組んだのね。中川素子さん、司修さん、駒形克己さんに、僕が司会をして。それを受けて、中川素子さんが「PeaBoo」の23号（一九九六年六月）に「絵本学会をつくらう」という文章を出され、その後、26号（一九九七年三月）で、僕が「絵本学会と絵本フォーラム」というのを書いて。そんなこんながあって、絵本学会というのができたわけですよ。

今井 中川さんのフットワークは軽かったですね。それが結果的には今につながったのかもしれないですね。

三宅 中川さんは、色々な方に当たっては、「絵本学会を作りましょう」と呼びかけをされたと思います。そして、その反応は色々であったと思うんですね。それはつまり、絵本が学問として自立できるのかどうか、

みたいなところで。

今井 そうですね。僕のところに来られたのもいきなりでした。ちょっとお会いしたいんですけど……って、言われてお会いして。で、絵本学会を作りたいんですけどみたいな、そういう感じだったですね。

佐々木 私のところもそうです。四国におりまして、電話がかかってきて事務局をやってくれませんか？って。「うーん、事務局はちょっと……。だけど、作ることは賛成です」って。そんな会話が、二回くらいはあったと思います。

三宅 私も中川素子さんから電話をいただいた一人です。彼女の熱意が、私を含めて、はじめは消極的だった人も動かしていったと思います。

今井 たまたま武蔵野美術大学で事務局を引き受けることができたのは、タイミングが上手くあったのだと思います。僕自身も絵本を違う観点から見たいという思いがあったし。同時に、武蔵美の絵本コレクションがある程度形を成し始めていた時期でしたから。ですから、そういう資料を基にして絵本研究が進めて行けるだろうということもありました。それと、それまで絵本が児童文学の領域でしか位置づけられていませんでしたから。表現の分野の人たちも関わるべきだろうという、そういう思いもきっかけになったのじゃないかな。



三宅 武蔵美が、事務局を引き受けてくださったことは、大きかったですよね。私は、中川さんから武蔵美で今井先生が事務局を引き受けてくださったと聞いた時、あーこれで絵本学会はできるなって思いました。



吉田新一

今井 結果的に。その後、本当に、上手くいったかどうかはわかりませんが。

設立に至る過程で、太田先生から、お手紙いただいたいて、研究者ばかりの中に自分が入るのは場違いなんじゃないかっておっしゃったことがあるんですね。そのときも、絵本学会は従来の研究学会とはちよつと性格が違うので、改めてなが必要かということを考えましよう、と、太田先生といろいろ話をしていた経緯がありました。太田先生もそのときは納得されました。

でも、実際に絵本学会が立ち上がって、研究分野の充実を図っていく過程で、太田先生の構想にあった幅広い部分でのネットワークを作っていたということも、やろうとしても絵本学会ではなかなか実現できなかったことも事実です。それが、今の「子どもの本WAVE」の誕生に繋がるわけですが、この「子どもの本WAVE」と絵本学会という二つがうまく機能することで、当初の理想が実現できるのではないかと思っています。

竹迫 一九九七年五月五日設立総会の前に、初代会長を引き受けられた吉田新一先生の、当時の思いは、どういうところにございましたか？

吉田 中川さんは、たまたま日本女子大の大学院に向していたで、毎週お会いするような間柄でした。いつごろからか、中川さんから具体的な、こういう学会を作りたいというお声が聞こえてきましたから。今、お話があったように、突然電話でつてわけではなかったんです。絵本学会つてもはありませんから、幅を広げてどうなるかわからないけど、皆さん集まって絵

本学会の設立準備の話を進めながら、絵本のことを研究する場ができるのはいんじゃないんですか、つていうような感じでお聞きしてたんですね。それで、最後に会長の話になって、私の方からいろんな方を会長候補に挙げたんですけどね。あれは確か今井さんだったと思うんですけど、「あなたが引き受けなければ、絵本学会はできません」つて…。

その頃、私はまあ定年間近だったもんですから、「定年までの間」つていう文章を書いて設立の皆さん方に無理やりご了承いただく形で、そのお約束の通り、定年と同時に約束ですからということでお会長の下ろさせていただきました。

今井 会長が決定したのが、一九九六年の十二月二十七日です。このときに、全員一致で吉田先生にお願いするのが一番いいということになったんです。竹迫 設立総会での基調講演は、印象に残っていますか？

吉田 あの基調講演は、設立準備会の皆さん方が設立までの間に語られたご意見を、私自身が学ばせていただいて、何より、太田先生の熱い熱い思いにはじまり、太田先生のご了承を経て先生のご意見で、この絵本学会ができたつてことを申し上げたつもりなんです。

竹迫 設立総会の際の、皆さんの思い出は？

佐々木 そうですね。そもそものスタートでは、絵本は、今までは子どもとの関わりが語られすぎていて、美術的な視点での研究が欠けてるので、その視点からの研究というものを主にやりたいというのが絵本学会の趣旨でした。私なんかは子どもとの関わりでしかやってきませんでしたから、あつ、これは、私たちが従来やってきたことに対するある面では批判的なかなつていう思いは強く持ちました。しかし、一方で子どもへの視点は絶対に必要だといふふうに思つてましたので、これからは絶対におこるんだろうかつて期待はありました。

ただ、設立総会、今見ているわかるんですが、全部関東の方ですね。関西勢がない。ですから、そういう点では、私は、一番後ろのほうからずつとスポットライトの当たつてる部分を見るような感じで、これ

からグラフィックとか美術的な面からね、何か新しいものが始まるんじゃないかつていう期待はずくありましたね。

三宅 私も第一回から出ています。そして、率直にこれだけの人が絵本に興味を持っているんだつていうこと、そして、いろんな分野の人がいらつしやるということを感じました。ものすごく盛況でしたよね。人が溢れてました。それだけのものが、絵本学のようなものに対して熱い思いを持つてつていうのが感じられました。その日のことをよく覚えています。

今井 僕はあの時は事務局でしたから。まして何も無い状態ですから、まず無事に立ち上げなければいけない、それだけでした。ただ、武蔵美が事務局になったのは、ある意味で正解だったと思つています。バックグラウンドがあつたということもありますが、色んな形で色んな人たちが支援していただけたんですね、それで、ここまで来れたのかなと思つてます。

吉田 私もその通り、今井先生のご努力が実を結んだと思つてます。ただ、絵本学会できてからチラチラ私の耳に間接的に届いてくるのは、果たしてどういふ活動がこれから実を結ぶのかつていう疑問を持つて方がいまして、様子を見てから入るなら入るつて声も多かったですね。そういう意味で、一番最初のときはいろんな方がいらつしやつたんですね。それだけに、設立大会を終えたあと、色んな手紙が来てるんですね。失望したつていう手紙から、これからは楽しみだつていう手紙まで。失望したつていう手紙のなかには、子どもの視点を失つてしまった絵本は成り立たないんじゃないかと、そういう意見がかなりあつたんですね。もちろん、当時そういう視点を抜いていたわけではないんですけどね。たまたま視覚表現をもう少しきちつとクローズアップしようよつとところがあつたもんですから、そういう分野の方からはかなり批判的な声もありましたよね。

三宅 私なんかは、それまで絵本について発表する学会がなかつたんです。だから日本保育学会というところで発表してきたんですけど、びつたり合つてなかつたんです、その学会と。絵本学会ができて、もつとトータルに絵本のことを考える場ができたつていう喜びは

すごくありましたね。それと、大阪からは子どもとの関わりのある方も沢山入っていただいたんですけど、その方たちも自分達が持っていない、今まで考えてこなかった視点から、絵本を考えられるっていう喜びはありました。だから、子どもの視点がないと初めから考えられた方には、私には違和感がありました。そういう絵本に関する総合力をどんな形で発表して反映していくのか難しいですけど、絵本学会は、それがやれるところだという確信はもてました。

竹迫 今考えてみると、設立総会では、熱い思いを持ってこれを立ち上げた人たちがいて、その人たちがあられだけ熱く語っているのだから、とにかく関わりを持っていこう。だけど、どう関わっていけばいいのか、自分のスタンスはまだ見つけられていないという人が多かったのじゃないかというふうに思います。三宅先生がおっしゃったように、絵本というものを語られる学会、場ができたと思われた方も多かった反面、逆に、その思いが、それぞれのスタンスで思い描いた自分の岸に向かって、近くなったのか遠くなったのか、人によってすごく異なる絵本学会の十年だったかなという気がしているんですけど。

今井 大事なものは、周辺分野とか異なった分野の方たちが交流しない限り、どんな研究も発展することはありえないと、僕は思うんですけど。

絵本学会の現状

竹迫 具体的には、周辺分野というのは、会員構成からすると、どういう方たちをいうのでしょうか？周辺というものをどういうふうにとらえていけばよいですか？

三宅 私の印象ではね、絵本学会の第一世代は、「絵本は私の主たる研究分野ではない」というふうに思いつつ参加している人たちだと思います。だから、もともと周辺分野なんですよ。私の場合だったらイギリス児童文学っていうところから来ているから、絵本はあくまでも研究の中で派生してやってきたことだった。ほとんどの第一世代の人たちには、絵本の専門家っていうのはないって認識を、私は持っていました。でも、今入会する人たちは、本当に絵本が好きでとか

純粋に絵本のことを研究したいとか、その辺の違いは第一世代と第二世代との違いといえるんじゃないかって思いますね。

今井 たしかにそうですね。

三宅 私だけでなく、皆さん、口癖のように絵本は専門ではないと言っていましたね。

今井 研究もそうだったし、絵本をどこから捉えているのか、またはつきりしていなかったですね。

佐々木 今もそうですね。深まってはきてますけどね。

絵本は、あまりにも学際的なんですよ。私も、会長になったとき、絵本学会ニュースに書かせていただいたんですけど、絵本研究は私のメインでずっとやってきたつもりだったんですが、例えば美術館の学芸員の方が作家・画家の展覧会をするときに語られる言葉だとか、それからイラストレーターの美術的な面からの発言だとか、大学の先生であつても絵本というものを絵画の構造分析とか象徴論の視点で深く捉えようとするものとか。絵本学会のこの十年間というのは、頭には日本語で「絵本」というのはあるんですが、そこへ参入してくるものが、あまりにも、私が思っていたものではない、異質な、いい意味で異質な、というものが、わーっと入ってきて同じ絵本という土俵にいるんだけど、はるか自分が辺境にいる場合とか、視点によっては真ん中にいる場合とか、それが絶えずモザイクのように学会のなかで変わっていく。で、大会のときに出てくる切り口の視点も、あーこんなものもありうるのかとか感心する一方で、時には、同じ言葉を使ってもね、通じないことがすごくあるんですよ。それは、いいことだろうと私は思うんですけど。そんなことは、他の学会にはない。他の学会は、大体同じような共通言語で成り立っている。それが、プラスになるかマイナスになるかは、いろいろ問題があると思うんですが。だから、実際に文庫をなさってる方とか、あるいは学芸員のように作家論・美術論をやられる方、それから作家そのもの画家そのものというふうには、それぞれに特化した領域の存在が、とにかく絵本というものが持つ可能性の数だけ散らばっている。で、それが今や、さらに映像が入ってきたりとか、アニメーションだとか漫画とかいったものとの周辺がくっつき始め



佐々木宏子

たから、深めるというよりもますます無限に広がっていくという感覚というのが私の中にはあります。だから、とにかく人の意見を聴く、絵本なるものについて研究なさってる方が、自分とは全く異質な視点からの言葉を使っていらいっしやるのを、とにかく聴くという十年間だったと、私は解釈しています。

竹迫 ということは、皆それぞれが、周辺領域だと思っていたということですよ。

今井 そうですね。いまでもそうですが、「いや、専門は必ずしもそうではないんですよ」という前置きをつけることもあります。ただ一方では、十年経つてまわりからはまあそう言わずに、この際絵本の専門に特化してはどうですか、と言われたりもします。この辺、僕の中では、まだ迷いもありますね。本気でそこへいくべきなのか周辺から語るから面白いのか。

竹迫 ひとつの視点にまとめていくことが価値あるわけではないし、佐々木先生の捉え方はとても的確だと思われるんですが、絶えずモザイクのようにめまぐるしく変わる視点を、ひとつの組織として捉えていこうとするものの面白さと難しさ。とてもいい面と、逆に難しさでもあろうかと思うんですけど…。

吉田 おっしゃるとおりだと思いますね。

今井 絵本学会ができる前に印象に残っていた言葉があるんです。『子どもの館』の中で、多木浩二さんが「絵本は奇蹟的なメディアだ」といったことをおっしゃっています。どういうことかと言うと、他のメディアは何らかの形で周辺領域と融合したり、或いは、影響を受けたって変異するんですね。それに対して、絵本は子どもというひとつの対象と向きあって来たため



今井良朗

に、ほとんど変質して来なかった。それが結果的に、絵本というひとつの確立したメディアとして長く生き続けてきた、まさに奇蹟的なメディアだという位置づけです。この場合、「子どもに向き合う」というのをもっと深く解釈していく必要があるのだと思います。具体的な問題としてそれを捉えていったときに、絵本というメディアの特性が、明確に出てくるようにも思いません。ただ、子どもという捉え方があまりにも多様なために、混乱をきたしていることもありそうです。ですから、絵本学会でも整理しなければならぬのは、その子どもという捉え方の問題を、もう少しわかりやすくするということ。或いは、異なっているのであれば何が違うのかということ。あるいは、そういう意味では多木さんの言葉は、ひとつの重要な示唆を与えているような気がします。絵本は単純に子どものためではないということもいえるでしょうし、さまざまな見方ができるでしょうが、子どもという対象と向き合うという、そこは非常に重要なのだらうと思います。しかし、これも言葉の使い方を間違えると、いや子どもだけじゃないということにもなるわけですから。

佐々木 実は今、全国各地で取り組まれている絵本に関わるさまざまな経験が、意外に絵本学会では生かされていないんですよ。出版社でコストを考えていらつしやる方から、学芸員の方から、編集者・画家の方から、幼児教育だけじゃなくて国語教育とか色んな方が、絵本というものに興味をもつていらつしやるわけですよ。一種のカオスみたいな。いろんな意味での刺激と情報交換の場になっていて、相互作用を起している

んですね。そうすると、私は私で、子どもの成長・発達という、ある面では美術の方があまり好まれない尺度でずーっとやってきているんですが、あつそうだからという考え方もあるんだとかね、私は全然考えてなかったけれども、子どもってものをこういうふうに見てらつしやる方もあるんだとか、絶えず新しい視点が入ってくるんですよ。それを更に私が受け入れて、また別の場で生かすなり、自分の研究で生かすなり、かなりできています。この十年間で。この学会の十年の論文をずーっとたどってきたら、子どもというものの捉え方が、ものすごく多様に出ていて、それこそ翻訳の問題であつてもそうですし、タイの絵本だとかロシアの絵本だとか、あるいは構造分析だとか、あるいは歴史的な考察とか、日本の明治や大正期の絵本とその時代の子どもの関わりはどうだったかとかね、かなりの面で子どもというものが入っているんですよ。で、現実今生きている子どもと今ある絵本との関わりで見ているのでは見られなかった深い歴史的視点がそこで入ってくるし、異文化のタイとかロシアとか欧米での視点も入ってくるし、センタックの絵本であればそれがたとえ構造分析であつても子どもの視点が入っている、目の前の子どもから、世界的な子ども、異文化の子ども、歴史を通してそれこそ百年とか千年前の子どもと、すごく深い構造的な広がりを持つてくる。そんな刺激を絶えず私は受けていて、それが私が絵本学会に通う大きな理由です。そういう意味で、絵本学会はかなり役割をはたしてきた気がします。

絵本学会は構築できるか？

三宅 私、二号から八号まで、この絵本学会の研究紀要「絵本学」の刊行と深く関わってきました。結局、学会としては、受身に投稿されたものを刊行するという形なんですけど、それに留まらずどのように論文を査読するかということで、絶えず試されて来たと思うんです。三人ぐらいの査読委員がそれぞれの論文を読んで色々やり合ってきたんですが、それは、ものすごく刺激的でした。ある方はこれはいいって評価したのに、ある方は駄目って、そういうことは山ほどあつ

たんです。でもそこを両方大事にしなから、研究した人を育てていくような視点っていうのを、大事にできたつもり。例えば、もしかしたらこういう論文はこれが初めてかもしれない、という時には、駄目をつけた方もこういうのは今までなかったのだから、もう一回書き直してもらいましょう、みたいな。手間隙を掛けて、一ヶ月とか二ヶ月とかの書き直し期間を経て、書いてもらったものも多いんですよ。まだまだいろんなものが出てくる可能性があるんで、査読する側がいつも問われるって思ってきました。「絵本学」というものがあるのではなくて、それを構築するという感じでした。

今井 僕も最近になって、かえって研究の対象としては、絵本の可能性があるような気がしています。というのは、どの学問領域もそうですが、固定した形がありますよね。専門性というか。なかなかそこから出ていこうとはしないところがあります。それに対して絵本学は、ある意味ではつきりしたものがなければ、それだけつながつてきているように思います。今後の研究のあり方って、すべての分野がそうあるべきだと思のですが。そういう意味では絵本の研究の可能性はまだまだたくさんあるはずだ、って。

吉田 多木さんの続きですけどね。どの学会もそうだと思うんですけどね、交流の場っていうのは情報交換という機能がメインだと思うんですよ。研究っていうのは蓄積ですから、まあ自然科学なんか日進月歩するようになっては文字に書く以前にどんどん進んでいってしまいがちなんです。絵本学会のような文化的なものはやっぱり文章に書いて残して批判を受けながら積み重ねていくっていうものですよ。ですから、紀要は絵本学会にとつて、大切なものだと思うんですよ。普通、大学にいる人は大学の紀要とかを使つてらつしやるでしょうけど、大概それは発表するだけであつてね、読者の方が読んでばらばらなことやつてますから身を入れて読んでくれる人はいない。この絵本学会ができて「絵本学」っていう紀要があるから、ここへ出そうという人は、学会だからってそれなりに評価してもらって、載論文の質の問題に責任を持つわけですから、これ



三宅興子

が段々積み重なっていくと、「絵本学」に論文が載ったということが注目される。「絵本学」をまず覗いて……という風になる。そういう形にこれをもっていかないといけないと思ってるんです。文書で残れば、それは役に立つんですよ。

太田 要するに建築中。構築中なんだよね。

吉田 絵本学ってのは何かって初めからわかっていたらやらないですし、模索しながら。試行錯誤で出てくると思うんだけど。でも、抽象論も哲学も必要だけれども、個々の具体的な活動や研究を積み重ねていく。絵本学会も立ち上げてから、年数が経ていくと周囲の状況だとか学会自身の自覚とか、変容して変質していくということが大事だと思うんですよ。そういうのを絵本学ってのに戻せば、絵本学ってのはそういう形で方向性みたいなものがおぼろげながら見えてくるってことも、時間の経過の中ではあると思うんですよ。佐々木 そうですね、絵本学会というのは絵本の持つ可能性を探り続けるひとつの集団っていうのは絵本の持つんなふうにありますね。それで同じ子どもとってても教育で語る子どもとていうのは体制化された学校教育を通じた語りですよ。でも、私なんか絵本を通して語る魅力は、そうじゃない既成の教育体制から見えない子どもとていうものを絵本っていう視点とおして見るっていうか、もって生活と結びついていてもって子どもの自由な心と結びついた、ある面では既成の教育に対するひとつの対抗文化みたいな形で私は捉えているんですが。最近人文系の学問がものすごく疲弊をはじめて、ITとか自然科学には予算ががんがんとつくだけだ人文系とか美術なんか、もう全然だめ

なんです。競争原理が入ってきてますます格差と乖離がきている。で、なぜ自然科学がこんなに学問としてどんどん伸びてはやされるかってことを考えたときに、使えるんですね。商品にもなるし。現実の社会っていうものの経済効果を高めていく。で、それに対して、そうじゃない人文系の学問、絵本学もそうだと思うんですが、あまりにも拾わなければならぬ要因が多すぎて、難しいんですよ。けれども絵本学は、吉田先生がおっしゃったように、限定されてないわけですよ。で、そうすると「学問」ってものから切り落とされていったものも、絵本学の中には参入してくる可能性があって、私なんかそこで子どもというものを中心にすえるんですけど、まだ子どもというものが激しくって、同じ「子ども」って言っても全然違うものをみている研究が増えてるんですよ。実際には、子どもも「子ども」という枠ではくれないくらい多様化してきているということもあって、そういう点では、変化し続ける社会の中でのすごく多様な媒体という観点を持った絵本を核にして、その可能性を探っていくわけですから、複雑極まりない。でもそれが絵本というものが持つ魅力だし、他の既成の学問ではありえない形をうまくいけば生み出していくのになって。だから、決め付けない。限定しない。そして学問という名の下に瘦せさせないっていうか、それが絶えず自浄作用としてうまくできていくと、絵本学が、新しい文化として、特にそれが私なんかやっていると子どもという視点から考えると、絶えず柔軟な子どもへのまなざしってものをきちんと押さえられるような領域になっていく。それは、美術の方だと既成の美術とどういふ関係にあるのかよくわからないんですが、今井 絵本の場合、どうしても文学と美術というように、割と区分する傾向がありますね。でも実際には、絵本の一番面白いところは、あらゆる表現領域が入り込んだメディアとしての面白さですね。文学性、アーティスティック性、デザイン性、映像性、場合によっては音楽的な要素も含めて、これほどさまざまな表現分野を取り込んだメディアも珍しいと思います。そのことが、多様性にもつながっているのじゃない。ですから、表現に関する研究という点でも、絵画的な一面からだけ見て

も見えないのは当たり前かもしれません。そして大事なのは、その時代の生活や政治、経済も含めて成り立っているということ。そうした背景を丁寧に見ていく考え方も持たなければだめだと思います。ましてや絵本が子どもの文化と密接に結んでいるとすれば、子どもの生活や文化的な背景までとりこんだ状態で研究していかないと、表現の問題ですら見えてこない。そうすると否応なしに、子どもが好むデイズニー絵本の問題とか、コミックブックとの関係も抜きにしては考えられない。それも、絵本研究の面白さのところだと思っますね。そのことがようやく少ずつ、見えはじめています。そしてこうした研究の面白さを感じた若い人たちが参加し始めている。そういう意味ではあまり悲観する必要はないかなと感じています。

太田 参考までにね、今月の二十六日に教文館（東京・銀座）で、堀内誠一を語るつのがあるんですよ。堀内さんの出した本ってのは、「一〇人のイラストレーター」とか、まさにこの絵本学の法典みたいな本でね。堀内さんは編集者でもあるし、アートディレクターでもある。そういう意味では、絵本学会には、もつと本当は編集者がメンバーとして参加してほしいわけね。堀内さんのような天才はなかなか出ないけどね。

今井 本当は、堀内さんのような編集者の方がもつとたくさんいらつしやること、それから太田先生のような作家が何人もいらつしやること、ある意味では理想ですね。そうすると、それぞれが刺激になるはずですよ。ところが、なかなかうまくいっていない部分のひとつは、絵本を作られる方たちが俺たちには理屈はいらないとよくおっしゃいます。確かに、表現の上では理屈は必要ないでしょうが、刺激を受けることとはとても大事なことだと思います。研究と表現が相互に補完しあう関係が、絵本の分野でまだ足りないと思う。映画にはありますね。マンガの領域では、段々作られつつあるわけですね。研究領域が少ずつはつきりしてきて、そういう意味ではマンガの表現と研究は補完する関係ができてきた。でも、絵本はまだそこまでいってませんから。佐々木 なぜでしょう。

今井 お互いに距離を置いてますよね。絵本作家の方たちは研究なんていらなくてよく言われますし、俺の作品を語ってくれなくていいとか、結構ありますね。でも刺激になるような関係をつくっていかないと、相乗的にはうまくいかない。

佐々木 でもそうすると、イギリスでね、意外に絵本の研究っていうとアメリカなんか比べて少なくとも、もう、良い本出せば研究なんていらんじやないか。そういう流れは、今でも強いんですか？

吉田 まあイギリスはイギリス人の気質がありますからね。はっきり分けていっているのは、没故作家でなければ研究対象にしないということ。現役の人はね、対象にされない。もともと、文学研究自体にそういう性格がありますからね。古典を学ぶっていうのが研究っていう、そういう分野だってありますから。一方で、アメリカは児童文学の発達っていうのは、学校と切り離したところで活動してるとすよね、図書館活動っていうのを。児童図書館ってものが確立して職業として児童図書館員ってものも中心になって、それが出版とつながっていくわけですからね、そういうところから活発な良質なものが出てくるんで、枠組みが違わんですよね。イギリスは、どっちかっていうと保守的で、それが尾をひいているんで、絵本の研究って一番遅れているんじゃないですかね。

絵本というメディアの可能性

三宅 絵本学を考えると私は、先ほど構築中って言ったんですけど、絵本というメディア自体がまだまだ可能性をもっているっていうことも、この問題を複雑にしてるひとつの要因じゃないかと思えます。漫画とか映画とかは、成熟期を過ぎているのですが、絵本というのは、先進国では成熟期を迎えているかもしれないけれど、例えば、今、大阪国際児童文学館でアジアの絵本をやっている、そこで韓国の絵本とか台湾の絵本とかを見たり考えたりすると、それは、まだまだこれから注目されるメディアなんです。そこいら辺りが、固まった絵本学っていうものにならない理由のひとつだと思います。もうひとつ、「子ども」っていうキーワードが出てますけど、今、大人の絵本とか内

なる子どもを含めた読者っていうのも考えていってますから、読者論ひとつとってみても、かつての子どもを楽しませるみたいな素材なものではなくなってきたています。もつとさまざまなところで、もつと少数派の人とかいるんなハンディキャップをもった人の絵本とか出ています。さまざまな読者が想定されたり考えられるなかで、絵本学っていうのを構築していったら、おもしろい時代に自分がいると、私は思っています。だから、絵本学は構築されるのかっていうと、そう、なんかいろいろ考えてるんですけど、どうなんですか？うみたいなどころに自分がいるっていう自覚を持っていますね。

今井 そういう意味では矛盾しますが、いろんな人たちが絵本を語るといっても大事ですね。それによって核がなんとなく見えるぐらいいいことあると思います。日本の場合、絵本しか作らない作家が多いでしょう。でも、もう少し横に広がって、他の表現分野の人が絵本を作るだけでも随分変わるといいます。建築家が絵本作ったっていいですよ。それから、映画の人が絵本作るとか音楽家が作るのか。要するにメディアを渡り歩けるような、そういう制作側の思考が、もう少しあってもいいと思っています。日本はその点、まだ狭い気がします。今度、絵本学会の大会にも来るスロヴァキアのドウシヤン・カーライは、版画も作るし国では切手のデザインもしています。アニメーションも作りますからね。いろいろな仕事をしています。その中の一つが絵本です。別にヨーロッパやアメリカでは珍しいことではないですね。そんな動きは、これまで日本では少なかった感じがします。最近になって、コラボレーションがあつたり、ようやく変わってきたかなという気はします。

佐々木 戦後の絵本を、機関車のようにずつと引張ってきた方々の中には、ポップアップ、あれは絵本じゃないよとかね、保育絵本、あれは絵本じゃないよとかね、漫画、そんな問題にならないよとか。それが子どもの読書運動のなかでかなり強力な流れで、定着しちゃいましたよね。それが、いい絵本と悪い絵本なんて日本独自の分け方、出版社も「よい絵本」って

帯つけるじゃないですか。そういう切り方が強力にあつて、読書推進する人にそれがひとつの旗印だったことが今、ちょっと後遺症を残しているかな。だから、ミッキーはいけない、ウォルト・ディズニーは絶対いけなかったですから。それがセンタックがそんなことないよって言い出してから、がたがたに崩れてしまったりとか、そういうサブカルチャーみたいなものとの関わりだとか、それに対して絵本というものを出版社側も読書の側も運動してきた側も何か扉をしめてしまっている部分がありはしないかと。

吉田 太田先生の絵本学会に寄せる一つの夢は、新しい作家たちを育てたいっていうのがありましたよね。現状では出版っていうのがなかなかそれを受け入れないっていう。それがあつて、「絵本学」とか「BOO KEND」とかとは違う意味で積極的にそういう無名の人たちを評価していくような、そういう場も絵本学会の中で、というのが、太田先生の中にはあつたと思うんですよ。それをこれから、どういう形で、絵本学会の中で生かしていくかっていうことが今後の課題のひとつとしてあるんじゃないですかね。

太田 まあ、絵本に対する社会的な認識なんだよね。例えば、僕は昔、アメリカで、ある図書館から、*Breakfast with Authors*、ね、朝食を作家と一緒にっていう会があつて、呼ばれたんですよ。それは、作家も画家も、それから図書館の人とかいろんな人が来て、朝の8時半から、朝食を食べながらしゃべるっていう会なの。驚いたのね。日本でこういうのがあるだろうか。まずないのね。つまり、絵本に対する社会的な認識が、日本はもつと低いんじゃないのかとね。

三宅 社会とのかかわりって言うことですよ。作る側と社会とのかかわりということが、日本ではあんまり意識されないで創作活動ができるっていうことですよ。そのことがいいことがどうか別として、イギリスやアメリカでは、作家の方っていうのはいろんなところに出かけて話をしたり、子どもと一緒にワークショップをしたり、盛んにやっています。で、絵本学会に戻って考えてみると、研究大会のときに作品発表をされている方たちの、いろんな考えとか、作品発表の

場で明らかになったことが、学会全体にあまり反映されていらないですね。いろんな社会性の持ち方があるので、今後、開かれた学会としては一つの課題ですね。佐々木 そうですよ、もうつぶれましたけれど「月刊絵本」っていうのが、随分作家を生み出していきましたよね。それと同じように、新しい作家を生み出していく方向として、絵本学会はどうやればいいんでしょう。

今井 以前にも話題になりましたが、絵本学会が主催する制作のための講座を開設することもひとつの方法ですね。それと、作品発表されたものについても、丁寧の評価し文章化していく方法もあると思います。佐々木 なるほど。

吉田 そういう中に編集者がね。入ってくれば、場ができますね。

絵本学会からWAVEへ——波は打って、また返ってくる
太田 僕はね、絵本学会ができて、その後、WAVEで作ったでしょう。この目的は、具体的な普及活動なんです。だから、じかに子どもとお母さん方に接して、絵本を作るとか、色んなことやってるんですよ。それは、子ども夢基金っていう助成金が出て、それで東北行ったり九州とか行ったりという活動ができるわけ。だから、そこで子どもたちとお母さんが来て、例えば大きな紙に絵を描いてみようとか、テーマを与えて絵を描かせるわけ。子どもも一生懸命描くわけですよ。それを、お母さん方を見て、「これ上手いね。誰が描いた?」「僕です!」ってね。すごい感動する、心の通った交流ができるわけですよ。それが結局、親が子どもに絵本を読んでもあげるといようなものにながっていく。そこには、願いがあからね。だから、そういう具体的な活動をできるだけやりたい。子どもと直にふれるということがひとつ大事なことでね。昔、僕が小学校のころには、直感科の授業があったの。その直感科の時間が楽しみでさ、何もしなくていいの、何かっていうと先生が、田舎の道をずつと行って何が面白かったか書きなさいっていうわけよ。そこでさ、川にフナが泳いでいて群れていてあれは家族という感

じだったな、って書くわけ。それがひとつの直感科の授業なんだよね。今でも、これは面白い授業だと思ってる。そういう直に感性にふられる状況を沢山作るっていうことがね、今、大事だと思う。

子どもの本WAVEと絵本学会は、活動自体がね、違うというか。絵本学会は、一応理論的に物事を組み立てて、あるいは、歴史的な検証をしていくという作業をしなきゃならないと思うんですよ。WAVEの場合は、直に子ども達とお母さんと触れられる状況を作って、それに何を提供するかっていう活動だから、違うって言えば違うし、同じって言えば同じだし、人間形成だからね。

佐々木 でも先生。その活動っていうのは、戦後、子ども文庫が立ち上がった時に、子ども文庫や地域の文庫活動、読書運動とかが、一貫してめざした母と子が中心になってお互いに本を読みあう活動とかと共通していますよね。そうした努力は、日本はこの国よりもすごいんですよ。WAVEで目指されたものっていうのは、そうしたこれまでの活動にもうひとつなにかを付け加るとか、それをもうちょっと質を深くするとか、何かその辺はどうですか。

太田 うん。絵描きにしる作家にしる専門家しろ、実際にそこに行つて話しをするということね。それで、向こうの人と話してうちにプラスになるものが見つかるとか、同じ目標でやっていると感覚が生まれることが大切なんです。だから、九州から北海道までそういう機会をできるだけ作りたい。

三宅 私の理解では、もうひとつWAVEの大きな役割ってのは、みな「〇〇学会」とか「〇〇子ども研究会」とか、縦割りみたいになつていっているのを横につないでいこうっていう太田先生の発想というのか、それが一番学会と違うところだと思うんです。学会は絵本ってことで特化してやっているとんですけど、WAVEの場合は、それにとどまらずもつと横のつながりとかいう、個別に子どものことや絵本のことを考えていくものをつないでいこうというところがあるでしょう。これは、別のものであって、通底していると理解しています。だから色んな所へ行かれるのもそれはひとつなん

ですけど、もつと大きいのはWAVEの会合に出ると、普段絵本学会ではお会いできない方とお会いできるとか、組織していきこういうふうにしていらつしやる方とつながることができるってことも、大きいメリットですね。

太田 波だからね。繋がるわけですよ。それで、昔、中国行つて中国の図書館の人と展覧会一緒にやりましょうというところもあつた。で、具体的に上海でやりたり、中国の作家の展覧会を日本でやったりね。それはひとつの、WAVE的な活動だね。日本だけじゃなくて世界に向けて発信するというWAVEの思いがあるわけよね。波は打って、また返ってくるでしょ、そういう意味だね。

絵本学会のこれから
竹迫 今のお話を考えると、ひとつは時代とか社会とかということ抜きに絵本というものが存在しないということ、私たちに教えてくれているんだらうし、学会というのがそのなかで研究者、作り手、読者を育てて…

三宅 成立しているって言うことですよ。竹迫 絵本という文化を育てていく機能を持ちうるものになつていくことですよ。

今井 すべての学問に今言えることだと思えますが、絵本はそのことをもつと意識してやっていたら面白いんですよ。太田先生が、最初の頃おっしゃっていましたが、改めて表現の歴史も含めて日本の絵本の歴史を整理していくことも学会の仕事でしょうね。明治以降昭和の初期までの絵本の歴史もまだまだ、全貌が見えていくわけではないですね。表現の問題も含めて、さまざまな角度から見ていくと確かにまだまだやらなければならぬことがたくさんありますね。

竹迫 先ほどの吉田先生の地道に蓄積をしていくべき、蓄積が何より大切というお話も含めて、絵本学会のこれからの役割の大きさというのは見えてきたような気がするんですけども。

今井 表現の質の高さを、きちつと語って行く必要もありますね。そうしたことをやることで現代の作家の人たちとの交流が生まれるのかもしれないですね。

絵本学会二〇年の歩み

1996 1994

5月 太田大八氏「Pee Boo」16号にて、座談会「絵本学は構築できるか」を行う。
 6月 中川素子氏、「Pee Boo」23号にて、「絵本学会をつくろう」を発表。
 7月27日 太田大八、中川素子、今井良朗氏らによって、絵本学会設立のための第一回目の話し合いが持たれ、絵本学会設立に向けて、継続的に会合を持つことを決める。
 第二回設立準備の会合が持たれる。
 第三回設立準備の会合。「絵本学会設立趣意書」「絵本学会規約」「発起人予定者名簿」等の検討に入る。準備会の名称を「絵本学会設立運営委員会」とする。

1997

10月29日 設立運営委員会。太田大八氏より、絵本学会と絵本フォーラムという二つの視点で問題定義が行われ、絵本学会の性格、役割について協議を行う。
 12月9日 設立運営委員会。設立時期を確認、一九九七年五月十一日を目標として準備をスタートすることを決める。
 12月27日 設立運営委員会。朝日新聞、読売新聞の取材を受ける。「設立趣意書」「会則」「発起人予定者名簿」「入会案内」等をまとめ、役員候補を検討する。
 1月3日 日本経済新聞の「文化往来」にて、絵本学会設立準備の動きを紹介。
 1月13日 朝日新聞にて、絵本学会設立準備の動きを紹介。
 1月15日 設立運営委員会事務局を武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科今井良朗研究室に設置。
 1月18日 設立運営委員会。
 1月30日 設立運営委員会。
 2月14日 「絵本学会入会のご案内」を発行。
 2月26日 設立運営委員会。
 3月10日 太田大八氏、「Pee Boo」26号にて、「絵本学会と絵本フォーラム」を発表。
 3月28日 設立運営委員会。
 4月15日 「絵本学会設立大会開催のご案内」を発行。
 5月11日 絵本学会設立大会開催。(於・武蔵野美術大学) 参加者159名 設立総会前日までの入会者247名、賛助会員9件。
 絵本学会設立総会開催。絵本学会が正式に発足。
 ◆吉田新一氏初代会長就任を承認。
 ◆今井良朗氏事務局局長就任を承認。
 ◆絵本学会事務局を武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科今井良朗研究室に設置。
 理事会・運営委員会。
 理事會・運営委員会。
 ◆専門委員会(企画委員会・研究委員会・出版編集委員会・広報委員会)の設置。
 絵本学会NEWS NO. 1発行。
 運営委員会。



1998

10月25日 運営委員会。
 11月29日 運営委員会。
 12月22日 絵本学会NEWS NO. 2発行。
 1月15日 絵本フォーラム'98「絵本は「いま」現場からの報告」開催。(於・世田谷文学館)
 2月11日 理事会・運営委員会。
 3月14日 運営委員会。
 4月11日 運営委員会。
 4月28日 絵本学会NEWS NO. 3発行。
 5月10日 理事会・運営委員会。
 6月6日 理事會・運営委員会。
 6月6・7日 第一回絵本学会大会開催。(於・日本女子大学) 参加者234名(会員103名・非会員86名・招待者45名) 延べ参加者500名
 絵本学会一九九八年度総会開催。
 出席者96名・委任状120名
 理事会・運営委員会。
 特別講座「ドゥシャン・カトライによる絵本の創造」の開催。
 (於・武蔵野美術大学)
 絵本学会NEWS NO. 4発行。
 絵本フォーラム'98PART2
 『よい絵本、つてなんだろう』
 開催。(於・世田谷文学館)
 参加者130名
 絵本学会「関西圏」の集い開催。
 参加者31名(会員20名・非会員11名)
 運営委員会。
 絵本学会NEWS NO. 5発行。
 運営委員会。
 運営委員会。
 運営委員会。

1999

12月21日 11月21日
 12月24日 12月21日
 1月17日 12月24日
 2月13日 1月17日
 3月17日 2月13日
 4月17日 3月17日
 4月28日 4月17日
 4月20日 4月28日
 5月15日 4月20日
 5月16日 5月15日
 6月19日 5月16日
 6月19・20日 6月19日
 ◆吉田新一氏、会長辞任、6月19日'99大会まで太田大八氏会長代行。
 絵本学会NEWS NO. 6発行。
 絵本学会研究紀要「絵本学」NO. 1刊行。
 運営委員会。
 絵本フォーラム'99関西「絵本をもって集まろう!」
 「私が選んだこの一冊!」
 開催。(於・大阪国際児童文学館)
 理事会・運営委員会。
 第二回絵本学会大会「もっと自由にもっと豊かにーこどもとおとな ブルーノ・ムナリーへのオマージュ」



2004

- 4月1日 絵本学会事務局が筑波大学芸術学系 笹本純研究室内に移転。
- 4月6日 理事会。
- 4月20日 絵本学会研究紀要「絵本学」NO. 5刊行。
- 5月2日 絵本学会NEWS NO. 18発行。
- 5月11日 運営委員会。
- 5月18日 理事会。
- 6月 『BOOK END』創刊号刊行。
- 6月14日 理事会。
- 6月14・15日 第六回絵本学会大会「絵本と絵本美術館」開催。(於・岡谷市カノホール他)
- 開催。参加者417名(会員86名・非会員331名)
- 絵本学会二〇〇三年度総会開催 出席者51名・委任状90名
- ◆今井良朗氏第四代会長就任を承認。
- ◆笹本純氏事務局長就任を承認。
- ◆新役員就任を承認。
- 運営委員会。
- 7月5日 理事会。
- 7月19日 太田大八氏「子どもの本のWAVE」を提唱。
- 8月19日 絵本フォーラム'03「赤ちゃんと絵本のために、今大切なこと」ファースト
- 8月23日 (ブックとブックスタート) 開催。(於・世田谷文学館)
- 9月25日 絵本学会NEWS NO. 19発行。
- 9月27日 運営委員会。
- 11月9日 理事会。
- 11月22日 運営委員会。
- 1月19日 絵本学会NEWS NO. 20発行。
- 2月28日 運営委員会。
- ◆会則検討委員会を諮問
- 3月30日 絵本学会研究紀要「絵本学」NO. 6刊行。
- 4月11日 理事会・運営委員会。
- 5月10日 絵本学会NEWS NO. 21発行。
- 5月23日 運営委員会。
- 6月1日 『BOOK END』2号刊行。
- 6月12日 理事会・運営委員会。
- 6月12・13日 第七回絵本学会大会「絵本にできること―現在から未来へ」開催。
- (於・長崎 活水女子大学) 参加者28名
- 絵本学会二〇〇四年度総会開催。出席者29名・委任状124名
- ◆会則改定案を提案。
- 運営委員会。
- 7月19日 絵本フォーラム'04「絵本の「読み聞かせ」―それぞれの実践 それぞれの主張」開催。
- 9月4日



2006

- 1月16日 絵本学会NEWS NO. 22発行。
- 2月11日 運営委員会。
- 3月30日 絵本研究講座「絵本の時間表現」開催。(於・日本児童教育専門学校)
- 4月15日 参加者80名
- 5月13日 運営委員会。
- 5月15日 絵本学会NEWS NO. 23発行。
- 6月10日 理事会。
- 6月10・11日 小林敏也さんを囲んだ絵本表現研究の集い」開催。
- 3月12日 「小林敏也さんを囲んだ絵本表現研究の集い」開催。
- 2月3日 絵本学会NEWS NO. 24発行。
- 2月27日 理事会・運営委員会。
- 3月12日 絵本学会研究紀要「絵本学」NO. 7刊行。
- 3月30日 理事会・運営委員会。
- 4月10日 絵本学会NEWS NO. 25発行。
- 5月16日 絵本学会二〇〇五年度総会開催。出席者52名・委任状133名
- 5月22日 運営委員会。
- 6月1日 『BOOK END』3号刊行。
- 6月11日 理事会・運営委員会。
- 6月11・12日 第八回絵本学会大会「絵本とアニメーション」開催。(於・京都造形芸術大学) 参加者473名
- 絵本学会二〇〇五年度総会開催。出席者52名・委任状133名
- ◆会則改定案を承認。
- 運営委員会。
- 7月3日 絵本フォーラム'05「童話の世界を描く絵本」開催。(於・世田谷文学館)
- 7月30日 研究会委員会企画ワークショップ「いわむらかずおさんと自然観察から絵本を考える」開催。(於・いわむらかずお絵本の丘美術館)
- 9月17日 参加者16名(会員9名・非会員7名)
- 9月23日 運営委員会。
- 10月31日 絵本学会NEWS NO. 26発行。
- 11月26日 絵本研究講座「研究の発想と方法論」開催。(於・日本女子大学 百年館 低層棟) 参加者62名(会員14名・非会員48名)
- 運営委員会。
- 絵本学会NEWS NO. 26発行。
- 運営委員会。
- 絵本学会研究紀要「絵本学」NO. 8刊行。
- 理事会・運営委員会合同会議。
- 運営委員会。
- 絵本学会NEWS NO. 27発行。
- 新旧役員合同会議。
- 第九回絵本学会大会「描かれた子ども 描く子ども」開催。(於・文教大学) 参加者311名(会員113名・非会員115名・WS参加者50名・ボランティア33名)
- 絵本学会二〇〇六年度総会開催。



絵本学会設立趣意書

今日、絵本表現の場は想像以上に広がっています。考え方や対象の定め方も様々なら、表現性も実に多様です。多様な表現の世界を持つこれらの絵本を、単純な概念で分類することには無理があります。しかし、絵本の形式がそれほど単純でないことが十分承知されながら、一般的には、教育的意味や文学的意味をもって語られることが多いのが実状です。

絵本は、様々な要素を総合することで成り立っています。内容を表す絵と文、絵と文の表現方法や構成、複製するための印刷、用紙、装丁等々。これらがバランスよく組みあわされて絵本の芸術性やメディアとしての価値を生み出しています。絵本は、デザインとしての造形手法を内在し、視覚言語や視覚コミュニケーションの本質に触れる表現性も持っています。絵本は、一面的な絵画的評価や文学的評価だけにとどまらず、メディアや芸術表現といった分野を含め、もっと多角的な表現の視座からもとらえる必要があります。絵本の評価は、もっと幅広い表現の分野に置かれるべきでしょう。

絵本を固定した一つの表現形式とみなすだけでなく、表現の位相を把握し解明していくための研究が、新しい視野を拓くものと期待されるのです。それは、絵本学とも呼ぶべきものであり、絵本というメディアを介して研究される新たな学問領域だといえるでしょう。

そのためには、従来の絵本領域の枠組みを越えた、造形学、美学、美術史、哲学、記号学、論理学、教育学、言語学、心理学、文化人類学などの諸科学、また、デザイン、絵画、映画、演劇、文学、漫画その他様々な分野の専門家相互の協力による情報交換、共同研究が望まれます。

絵本学という独自の学問領域の確立を目指し、私たちは、絵本学会を設立しました。

2007

- 7月23日 絵本学会NEWS NO. 28発行。
- 8月31日 絵本フォーラム'06『長新太の遺したもの』開催。
(於・日本児童教育専門学校) 参加者60名
- 9月16日 絵本学会事務局が梅花女子大学児童文学科加藤康子研究室に移転。
- 12月9日 理事会。
- 1月25日 絵本学会NEWS NO. 29発行。
- 3月30日 絵本学会研究紀要『絵本学』NO. 9刊行。
- 4月21日 理事会。
- 6月30日 理事会。
- 6月30日・7月1日 第一〇回絵本学会大会『絵本と表現』開催。(於・武蔵野美術大学)

